

■セメント業界賀詞交歓会を開催

セメント協会は1月13日、東京丸の内のパレスホテル東京・葵の間で新年恒例の「セメント業界賀詞交歓会」を開催した。会にはセメント関係者をはじめ、官公庁、学界、関係業界から725名が参集した。



福田会長

冒頭、挨拶に立った福田修二会長は、次のように語った。

安倍政権発足以来4年余りが経過し、雇用・所得環境は改善したものの、個人消費や設備投資は力強さを欠いていること、また昨年は

国際政治面で予想外の事件が起こり、本年も大きな政治リスクが存在するとして政府に対し、引き続き経済政策重視の政権運営を要望した。

足元の本年度4～12月のセメント需要は対前年同期比3%減少した。しかしながら本年から今後数年間は東京オリンピック・パラリンピック関連の事業が立ち上がることや被災地での数多くの復興事業、大都市圏の再開発、リニア新幹線工事などにより比較的堅調に推移するのではないかと予想され、業界を挙げ安全管理を徹底しセメントの安定供給に万全を期すことを誓った。

また、老朽化が進む社会インフラや民間建築物に対する改修・建替え、耐震化を早急に着手する状況にあること、厳しい自然環境の中、頻発する自然災害に強いインフラ整備が喫緊の課題であることを示した上で、東日本大震災でコンクリート構造物が数多くの尊い命を救ったこと、セメント系固化材で地盤改良が行われた場所では液状化現象が抑えられたことに加え、最近では昨年11月の博多駅前道路陥没事故復旧工事

を例にセメントの有効性が明らかなることから、国土全体の均衡ある防災対策と災害に強い国土・街づくりを進める上で、セメントの果たす役割がますます重要になると語った。

新規需要開拓では、コンクリート舗装の推進が2013年から生コン業界とともに官公庁向けに積極的なPRに取り組んだ結果、国施工の道路でこれまでのトンネル部位以外に新規道路の明かり部でも増えてきているとし、さらに当協会が発した「1DAY PAVE」は1日以内の交通開放が可能なことから、最近では国を始め地方自治体でも採用が増えてきており、業界の努力の成果が徐々に現れている。

一方、セメント産業は多様な廃棄物・副産物を受け入れ、セメントに生まれ変わらせ、かつ二次廃棄物を一切出さない究極の環境産業であり、この資源循環の仕組みが市民生活や経済活動をしっかり基礎から支えているとした。またこれまでの経験を生かし東日本大震災で発生した災害廃棄物を大量に処理した実績が評価されたことから、環境省が立ち上げた「災害廃棄物処理支援ネットワーク」に参加し、昨年4月に発生した熊本地震においても、災害廃棄物を受け入れて製造したセメントを、復旧・復興の基礎資材として被災地に納品している取り組みを紹介し、災害廃棄物処理におけるセメント産業に寄せられる高い期待に対しても、その地域になくはな





経産省・佐藤審議官



国交省・木村課長



首都大東京・橘高教授

らない基礎産業としてこれからも廃棄物の資源化を通じ、循環型社会形成に貢献していくと述べた。

以上のこうした課題や取組みを通じ、しっかり情報発信するとともに、他業界の皆様とともに引き続き取り組んでいく所存であると結んだ。

続いて来賓として経済産業省 大臣官房・佐藤文一審議官と国土交通省 土地・建設産業局 建設市場整備課・木村 実課長から挨拶を頂戴した。

佐藤審議官は、わが国は災害が多い中でもしっかり生活基盤を維持して安全で豊かな生活が送れるように世界に示していくリーダーになる必要があり、そのために各種建築物やさまざまな公共施設など国民生活を支えるインフラ整備がますます重要になると語った。そのうえで、より基礎資材としてのセメント産業を認め、業界が取り組む新技術の開発や各種廃棄物処理に対して大きな期待を寄せた。さらに需要の面からも少しずつ明るい兆しが見えてきたとして引き続きセメントの安定供給と品質確保、安全対策に万全を期していただきたいと結んだ。

一方木村課長は、セメントを始めとする製造業が今後も持続的に発展するためには、まず公共事業予算を安定的に確保することが重要であると述べ、来年度予算が今年度を上回ったことや昨年10月の第二次補正予算も大型の補正がなされたことをあげ、セメントの今後の見通しも増大が見込まれていると語った。また建設業の課題として担い手の確保・育

成、そのための働き方改革と生産性の向上を指摘、5～10年先を見据えて取り組むことを示し、セメント業界に対して建設現場の円滑な施工に寄与していくためにさらなる安定供給を望むと結んだ。

最後に登壇した首都大学東京の橘高義典教授は、セメント協会が70年にわたり発行しているセメント技術年報(現セメント・コンクリート論文集)に触れ、これだけ長く続けているものは少なく、セメント業界が建設業界の発展に貢献していることを表し、今後も協力を期待すると述べた。また、自身が会長を務める日本建築仕上学会では、「祈念」は日本の神に祈ることから、乾杯を日本酒で行うルールを紹介し、会場に集まった参加者一同に祈念を呼びかけ、乾杯の音頭をとった。

橘高教授の乾杯にあわせ、交歓会では各所で新年の賀詞を交換する姿や、親睦を深める様子が見られた。終盤には竹内 章副会長による中締めにより盛会裏に閉幕した。

*

*

*